

# 久留米

# 通高 信専

2009年秋冬号  
[JANUARY 25, 2009]

久留米工業高等専門学校企画主事室  
〒830-8555 久留米市小森野1-1-1  
TEL:0942-35-9300  
http://www.kurume-nct.ac.jp/

## 第39回全国高専ラグビー大会

### 九州大会優勝！！そして全国大会

電気電子工学科5年 吉田 拓郎

#### <九州大会戦績>

- 1回戦 VS 都城高専 21-0
- 準決勝 VS 熊本電波高専 11-5
- 決勝 VS 佐世保高専 32-19

#### <全国大会戦績>

- 1回戦 VS 神戸市立高専 12-24
- 優勝 神戸市立高専

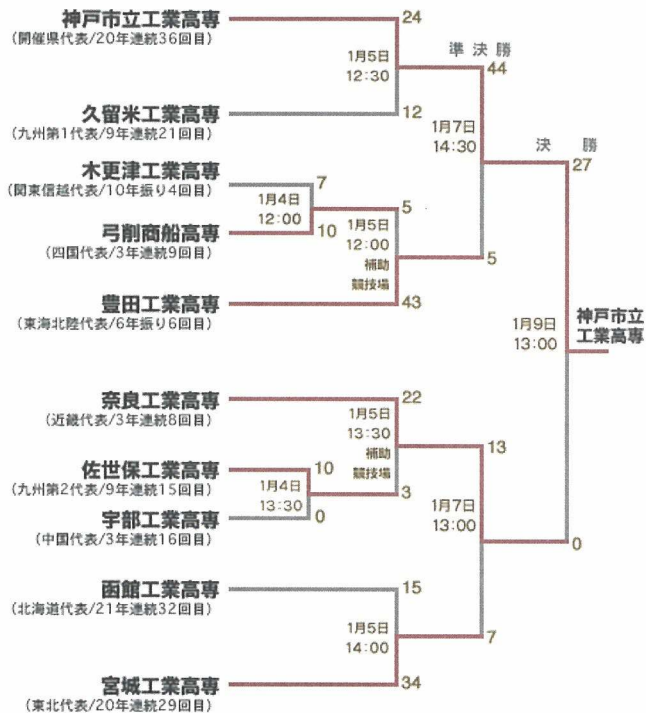
今回、久留米高専ラグビー部は、4年ぶりに九州大会優勝を果たしました。優勝できたことの大きな要因は、久留米高専ラグビー部の組織スタイルにあると思います。本校のスタイルと他校のそれには違いがあり、本校は、戦略・練習メニューなど、様々なことを部員が中心になって考えています。このスタイルにより、部員は自分で物事を考え、自発的に行動するようになっていきます。九州大会では、部員みんなが、勝つために自分で考え行動することができたのが勝因であると思いました。

全国大会では、組み合わせ、チームのコンディションなど色々な要因が全て久留米高専ラグビー部にとって良いほうに傾いていたと思います。しかし結果は1回戦、前年度王者の神戸高専に12-24と敗れてしまいました。大会が終わり全ての結果を見ると、神戸に勝っていたら全国優勝も目の前だったなと思います。またそう思う分なおさら悔しいです。

神戸戦、得点だけ見るとあっさり負けたという印象を持たれるかもしれませんが、内容は面白いものでした。前半キックオフ直後、スロースターターの久留米は簡単にトライを許し得点されてしまいます。その後は風下にもかかわらず上手く神戸の攻撃を防ぎ、前半を0-12で折り返します。後半は風上ということもあり、敵陣に攻め込みやすくなりました。そして後半8分、久留米がこの試合初のトライを挙げ、5-12となります。この勢いでいけると思ったのですが、神戸もそう簡単には崩れません。すぐさまトライを返され5-19となります。そこからは、久留米がまた返すもさらに返され、先に述べた結果となりました。

久留米は完璧な試合をしたか、と聞かれるとYESとは言えません。もっとミスが減らせただろうし、ゲームの組み立てでもっと上手く出来たはずだと、試合を観ていた人は勿論、試合をやっていたメンバーも思っています。しかし、メンバー全員が全力で最後まで戦いました。そして、本校ラグビー部のスタイルを、この試合でも個人個人が実行していました。完璧でなくても、素晴らしい試合だったと思います。

最後に・・・来年は、さらに成長し、素晴らしいチームになると思います。そして全国優勝を果たすと思いますので、皆さんご期待ください。



## 高専プログラミングコンテストで 特別賞を受賞

制御情報工学科

黒木 祥光

全国高専プロコンの自由部門で本校から応募した作品「ikoi」が特別賞を受賞しました。自由部門は文字通り学生の自由な発想で開発されたソフトウェアを募集する部門で、作品のプレゼンやデモに加え、マニュアル通りにソフトウェアが動作することも評価の対象とされます。特別賞は4作品に与えられ、最優秀賞、優秀賞（それぞれ1作品に授与）の次に価値のある賞です。

その他のコンテストでは、パソコン甲子園2008プログラミング部門にて5位入賞を果たし、SuperCon(Supercomputing Contest)2008にて情報処理学会と電子情報通信学会情報・システムソサイエティからそれぞれ若手奨励賞とスーパーコンピューティング奨励賞を受賞しています。



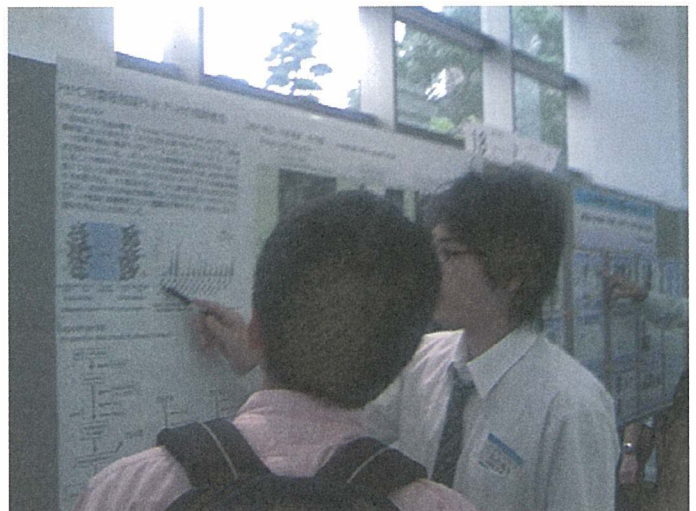
## 日本金属学会 第11回優秀ポスター賞受賞

材料工学科

周 致霆

2008年9月24日、第143回日本金属学会秋期講演大会(熊本大学)にて、専攻科1年、鬼木喬玄君が第11回優秀ポスター賞を受賞しました。講演題目は「PEFC用電極触媒Pt-Zr, Pt-Hfの微細構造解析」で、連名者は専攻科2年、千原裕基君と材料工学科指導教員、周致霆の3名です。

本研究は私が赴任してから始めたもので約1年半の成果ですが、本賞を受賞したのは学生諸君の勤勉さもさることながら、他機関（九州大学超高压電子顕微鏡室等）からの支援および学科内の理解があったためと思っています。感謝の意をここに表します。



## 高専祭を終えて

高専祭実行委員長

電気電子工学科3年 中島 健志

今年も無事に、伝統ある高専祭を終えることができました。今年度は「文化的バカ騒ぎ」というテーマを掲げて11月2日の前夜祭、3日の文化祭、そして高専祭の最後を飾る5日の体育祭の日程で行われました。

今年は、高専祭Tシャツ作成や文化祭実行委員会と体育祭実行委員会を分ける等、例年高専祭で行っていたこととは違うようなことをたくさん実施しました。どれも高専祭を成功させる大きな役割を担い、その効果を存分に発揮してくれました。

今後も、伝統ある高専祭が受け継がれ、ますます活気づいていくことを楽しみにしています。

### ・前夜祭（11月2日）

お昼に御神輿が高専を出発し、学生たちの力強い声で久留米の街を練り歩きました。

夜には打ち上げ花火が夜空を鮮やかに彩り、高専祭の始まりにふさわしい前夜祭でした。

### ・文化祭（11月3日）

今年は本当にたくさんの方々に来てくれてメインストリートは大勢の人々で賑わい大いに盛り上がりました。出店、ステージ、各学科による公開実験、部活動のなどの展示と多くの学生たちの輝く場をご覧にいただけたかと思います。

今回高専祭を行うにあたってご協力いただきました教職員の皆様、地域住民の皆様、学生のみなさん、本当にありがとうございました。今年も大きなトラブルもなく進行でき、また大勢の方にご来場いただきました。第43回高専祭を大成功という形で締めくくれたことができ実行委員一同大変嬉しく思っています。

最後に、実行委員として頑張ってくれた皆さん、本当にお疲れ様でした。ありがとう！



体育祭



文化祭



前夜祭

## 「体育祭をやる意味」

体育祭実行委員長

制御情報工学科5年 高瀬 章充

朝から「迫り来る黒棒」。二十歳にもなって3輪車競争。ハイレベルな応援合戦に辛すぎる二人三脚……。1度は無くなりかけた体育祭を、43人の実行委員・全高専生の力で無事開催することができました。今年度は高専祭Tシャツの販売、競技種目の刷新、運営方法の改良等、新たな試みに多く取り組みました。

しかし、なぜこんな大掛かりでしんどい行事を毎年するのでしょうか？ 高専とは、15～20歳までの学生が通う不思議な学校です。だから、大学でも高校でもできない、上級生の奇妙なテンションと、下級生のピュアなハートが生む特殊な体育祭を行うことができます。私は思います。長い竹を運び、やぐらを立て、神輿をかつぐ。普通の大学・高校ではできない事でしょう。普段、勉強に追われ（笑）他人との接触の少ない高専生にとって体育祭はとても重要な意味があるのです。

終わった今としては伝統ある高専祭に新たな1ページを刻むことができ、大変誇りに思っています。この伝統を絶やさず、来年はさらにすばらしい体育祭になることを期待しています。

最後に、この場を借りて後援会の皆様、教職員の皆様、地域住民の皆様にお礼申し上げます。

## 関東工場探訪録

機械工学科4年 増山 雄亮

私達機械工学科一同は前期末試験を終え、その出来を考える間もなく、9月24日にこの旅路についた。福岡空港に新しいスーツを身にまどって集い、人によってははじめての空の旅路である。当然胸踊り期待にあふれている。

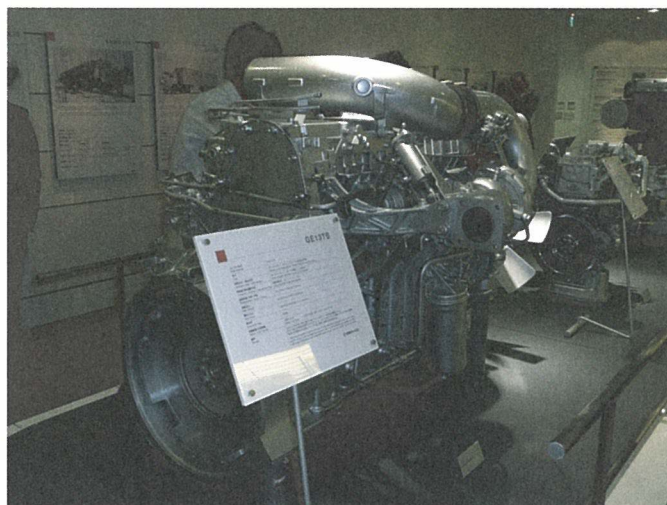
しかし、我々の旅行は無論単なる旅行ではない。工場を見学する研修である。楽しむのは大事であるが、ここで身の回りに目を配りたい。例えば、集合する為に乗ってきたであろう車・バス・電車、また空港ではたくさんのコンピュータが使われている。そして広い敷地内でたくさんの電気が使われている。旅行のはじまりを見渡しただけでも、様々な技術の集合によって私達の生活は成り立っているということがわかる。旅行のプランから、こうして見える身の回りの工業を体系的に見てまわるとするのが今回のコンセプトではないかと自分なりに解釈しながら研修がスタートした。

初日の見学先はNHKである。「TVの」ではない。日本発条というばねの会社。そのばねの製作技術を生かしてハードディスクのカバーの製造に手を出したというのには驚いた。

二日目は日産ディーゼル（UD）。西鉄にもバスを供給している。個人的には質疑応答を含め一番楽しめたと思う。午後には所沢航空発祥記念館へ行き、各種航空機に目を輝かせる担任に技術者の面影を感じつつ終了した。

そして三日目はJFEスチールと東芝（タービン工場と科学館）。これまで部品メーカーの大手と、エンジン等のユニットや完成品としてのバス・トラックを製造する工場を見てきた我々は、これらの製造の原初ともいえる鉄（鋼材）の製造現場を見学した。さすがに大きな工場（群）で島一つが工場であった。巨大溶解炉等は誠に圧巻であった。そして科学館で技術史、そして未来の技術などのまとめをうけるような形で終え、四日目の都内自主研修を迎えた。各人大変有意義な一日を過ごせたと思う。最終日は科学未来館でさらに様々な技術の存在を学んだ。

以上のように、日本の産業界をかいつままで俯瞰するような旅行を終えた。全体的な印象としては、最近の工場は本当にきれいだということ、そしてトップをいくような企業だからこそかもしれないが仕事に情熱、あるいは誇りを持っている人が多いということ



感じた。将来経営者として活躍することを夢みる我が身としては、どのような業種となるかは別（というより未定）として、仕事に誇りを持てる、社会に貢献できる公器としての会社をつくっていきたいと思う次第である。

最後に、担任の先生をはじめとして、今回のような貴重な学びの機会を与えて下さった関係者の皆様にクラスを代表してここに一筆御礼申し上げます。

## 工場見学旅行から帰って

電気電子工学科4年 原田 翔夢

私たち電気電子工学科は、このたび4泊5日、関西地方へ工場見学に行きました。見学先としては、大阪大学吹田キャンパス、関西電力(株)電力技術研究所、三菱電機(株)高周波光デバイス製作所、(株)ルネサステクノロジー北伊丹事業所、関西空港などがありました。

初日の大阪大学では、主にレーザーに関する技術とその応用機器等について見学させていただきました。私は、いままで大学の研究施設といったものを、この目で見たことがありませんでした。そのため、施設内に入ったときはあまりの規模の大きさに驚きました。特に、LFEXレーザーという装置を見せていただきましたが、それは装置だけで巨大な部屋一つ分の大きさがあり、瞬間的に全世界



の消費電力の数百倍ものエネルギーを持つ大出力レーザーを発生させることが出来るそうです。あまりのスケールの大きさに、正直度肝を抜かれました。これだけの設備が大学の研究施設にあるとは思っていなかったの、大学に対するイメージが大きく変わりました。また、大阪大学には久留米高専から進学された先輩がいて、その方からは大学でのレーザー関係の研究結果から、大学編入に関するアドバイスまでしていただきました。やはり、実際に久留米高専から大学編入をされた方なので、実体験を基に大学生活の楽しさや大変さ等を詳しく説明して下さいました。

2日目には、関西電力(株)電力技術研究所に見学に行きました。関西電力といえば、関西地区の電力供給等を行っている会社ですが、こちらでは、発電所の保守や電力制御に関する試験設備から、光通信開発や新エネルギー実験施設といった5つの設備の見学をさせていただきました。やはり大きな企業だけあって、どの設備も非常に巨大なものでした。普段、企業内を見学する機会はあまりないため、あらゆる設備が新鮮に見えました。電力会社というと、配線関連の設備が主であるイメージがありましたが、技術開発関係の施設が多かったのが意外でした。それだけ、新たな技術開発を企業が必要としているのを感じました。

この他にも、さまざまな企業を見学しましたが、いずれも普段目にする事のない高度な技術や施設を見ることができました。

私は、今後の進路について決めかねていたため、就職後や進学後についてぼんやりとしたイメージしか持っていませんでした。しかし、実際に大学のキャンパスや企業の施設内をこの目で見ること、今後の進路についての参考にすることができました。そういう意味

でも、今回の工場旅行は非常に有意義なものであったと思います。これから工場見学旅行に行くみなさんも、旅行中は今後の進路について考えながら見学すると、参考になると思いますよ。

## 工場見学旅行記

制御情報工学科 4年 川崎 元気

定期試験が終わり、再試の恐怖におびえながら4泊5日の旅行が始まった。試験のことは1週間忘れることにした。普通の高校生は2年生で行く旅行というものを、高専生は4年生で行くのだから、楽しみにしていた人にとって喜びはひときわだったと思う。

制御情報工学科が見学したのは、富士通、ソニーEMCS、日立ディスプレイズ、日産自動車、日立ビルソリューション・ラボの5社と、パナソニックセンター展示場だった。

関東に到着早々、富士通を見学した。素敵な社員の方に展示室を案内していただき、そこでロボットの説明と実演を見学した。ロボットは、重心などを計算してバランスを取り、「太極拳」ができた。 「しこ」が踏めたりした。このロボット、自分で好きにカスタマイズできるものらしい。ロボット好きにはたまらない逸品だと直感した。質疑応答でも、学生のみならず先生までも興味津々だった気がする。その他にも、静脈認証や画像処理など興味深いものを見学することができた。



ソニーEMCSでは、本校制御情報工学科の卒業生のお話を聞くことができました。学校の授業も大事であるということを言っていた。特に電磁気学が大事だと…。何気なく受けている授業だが、就職後に役立つのならもっとまじめに受けとくべきだったと思った。

日立ディスプレイズは、上層部に高専卒業の方がいるということで、高専生にも出世のチャンスがあることを強調してくれた。プレゼンでは液晶についての説明があった。プラズマTVと液晶TVとの違いについて知ることができた。

日立ビルソリューション・ラボでは、エレベーターやマンションのセキュリティの最先端機能を見ることができた。また、エレベーター技術の進歩を体験できる展示場を見学することができた。技術の進歩に伴って、エレベーターは移動速度が速くなり、浮遊感を感じさせないものとなっていくのがよく分かった。就職して、こういった研究をするのも楽しいかもしれないと思った。

今回の旅行を通して、社会で働くために今の勉強が大事であること、働くということがどういうものなのかを知ることができたと思う。この旅行を機に、自分がしたいことを考えるようになったし、今、やるべきことが何なのかを考えるようにもなった。とても有意義な旅行だったと思う。旅行が終わると、すぐに旅行気分から現実に戻されたが、旅行以来クラスの雰囲気も以前に比べて一丸となっている気がした。

## 工場見学旅行報告

生物応用化学科 4年 筒井 亮太

9月の終わり、暑さも徐々に収まりつつある中、かねてから楽しみにしていた工場見学旅行は始まった。夏には短期インターンシップもあり慣れたはずではあるものの、空港に集まったスーツ姿の僕らにはどことなくぎこちないものがあっただろう。旅行は4泊5日、僕らは空を飛び関西の地に降り立った。

1日目は理化学研究所を見学した。ここでは生物系の基礎研究を行っており、最先端のバイオテクノロジーについて学んだ。

2日目には森永乳業神戸工場を見学した。ここで僕が驚いたのは、その徹底した衛生管理体制である。工場内の床は衛生レベルごとに色分けしており、内部を高気圧にすることによって、外部からごみ

等が入らないように工夫されていた。また、ここではチーズ作りもさせていただき、みな和気藹々と実習に取り組んでいた。しかし、一緒にできた「乳清」は、飲む者の心に確かな傷を残した…。

3日目はカネカと資生堂を見学した。カネカはあまり聞いたことのない企業であるが、様々な商品の中間素材を作っている会社であり、確実に僕たちの生活にかかわっている会社である。たとえば家の建築材料として使われる樹脂や、発泡プラスチックなどがその最たるものである。ここでは化学技術のことはもちろんであるが、人間関係の面でも学ぶべきことがあった。それは「挨拶は基本」ということである。これは一見当たり前のように思えるが、はっきり言ってこれができない人間は近年確実に増えてきていると思う。カネカでは挨拶が徹底されており、そのためにどこか暖かいような職場の雰囲気があった。「挨拶ひとつでその人の印象も大きく変わる」という言葉は、深く心に残っている。

僕は化学コースであるのだが、今後もし就職することになれば、このような化学系の会社になりたいと考えていたので、この会社での体験はとても有意義なものであった。資生堂でも工場内を見学させていただいた。ここはやはり女性の従業員が多く、女性が働きやすい職場作りがなされているという感じてあった。

3日間の体験を終えて見ると、思いのほか得たものが多いことを実感できた。特に僕は進学しか考えていなかったのだが、それだけではなく広い視野を持って可能性を見出していくことが重要なのだと実感した。



残りの2日は大阪を満喫した。やはり友達と過ごす時間とはいいもので、日ごろの勉強疲れを癒す楽しい旅行となった。終わってみるとあっという間の旅行でどこか寂しくも感じたが、この旅行で得たたくさんの事を今後に生かしていきたいと思う。

## 工場見学旅行に行っ

材料工学科 4年 荒木 遼

私たち材料工学科は9月25日から29日までの5日間、関東地方に工場見学旅行に行っ

- ・日本航空(株) 羽田整備工場
- ・(株)IHIマリンユナイテッド
- ・東芝マテリアル株式会社
- ・高エネルギー加速器研究機構
- ・産業技術総合研究所 つくばセンター
- ・お台場 フジテレビ
- ・日本科学未来館

を見学させていただきました。

一日目の日本航空(株) 羽田工場では飛行機の部品が整備されている様子を見学しました。飛行機の部品はすごく大きかったです。

なかでも印象に残ったのは筑波の高エネルギー加速器研究機構です。ここではBelleという大きな加速器を見学させていただきました。加速器は非常に大きな円形の構造で全部を見ることはできず、計測器が設置されている部分だけを見学しました。計測器が設置されている部分だけでも大きくて、今までニュースなどで聞いたことのない加速器の実物を見ることができてよかったです。高エネルギー加速器研究機構は、粒子に関する研究が行われていました。粒子を調べることによって、宇宙の秘密が分かるそうです。

宿泊した横浜と東京のホテルはどちらも高級なホテルで、廊下からはネイティブな英語が聞こえてくるような国際化が進んだ場所

でした。また、横浜のホテルは海に近く、ホテルからはライトアップされた船が見えてとてもきれいでした。宿泊した2日目には皇族の方がお見えになっていて、警備の人たちがたくさんいました。

4日目の自主研修では東京を見学しました。東京は自分の住んでいる地域と違って、人が多く外国人もたくさんいました。また、時刻表を見る必要もないほどに電車が次々とくるのに驚きました。

今回の工場見学旅を通して製品が作られている現場を直接見学でき、これからの将来の進路を決める際に役に立つと思いました。



## テマセク ポリテクニクの学生が久留米高専を訪問



テマセクポリテクニク校の学生と共に記念撮影

九州沖縄地区の10高専は、シンガポールの工科大高等教育機関の3校と交流協定を締結しており、今回、その中の1校であるテマセクポリテクニク校の学生39名と教員2名が、北部九州への修学旅行中、学校交流として10月7日に久留米高専を訪問しました。この学校交流への参加を本校の学生に呼びかけたところ、55名もの多くの学生が自主的に参加しました。

校長の学校紹介の後、両校の学生が10のグループに分かれて、学内施設見学、学生自身が考えたゲーム、会食、ギフト交換などを行い、交流を深めました。

限られた滞在時間でしたが、学生同士はすぐに打ち解けあい、お互いの写真撮影に応じるなど、とても有意義な時間を共有するとともに、貴重な体験を得ることができました。時間は、あっという間に過ぎ、お互いに名残惜しさを感じながら、テマセクポリテクニク校の学生たちは、次の目的地である熊本へ向けて出発しました。



学生がアーチを作り送り出す



## 留学生紹介

機械工学科3年

アクマル カイリ ビン ムハザル



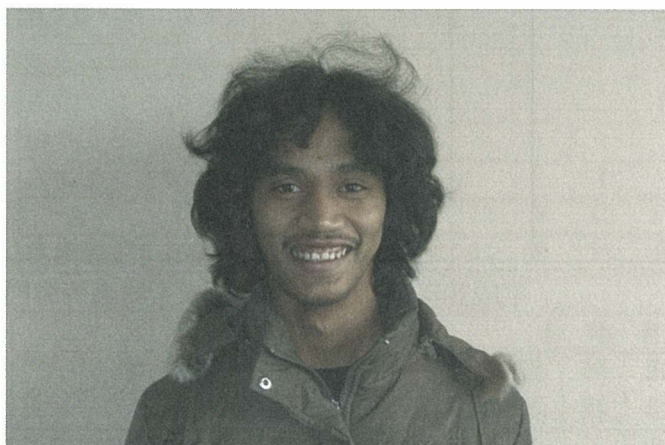
私はマレーシアから来た留学生のアクマルです。いろんなことに興味がありますが、その中で音楽を聴くこととスポーツをすることが好きです。スポーツでは、とくにサッカーや卓球をします。

車とか機械的に動いている物が好きなので、ここでは機械工学科で勉強することを選びました。また、日本の高等専門学校の中で久留米高専は優れている高専の一つと言われているので、ここで留学できることを誇りに思っています。ここに来る前に、マレーシアにある特別な学校で日本語を2年間ぐらい勉強しました。しかし、その時間はあまり足りなかったと思います。

私がここにいるうちに勉強はもちろんのこと、できるだけ様々な文化や、習慣などを体験したいと思います。そして、たくさんの友達を作ったり、一緒に遊んだりして、楽しい生活をしたいです。これから、色々お世話になりますが、よろしくお願いします。

機械工学科3年

モハマド ロスディー ビン イサ



私はマレーシアから来た留学生のロスディーと申します。趣味はバドミントンやビリヤードをすることです。辛い食べ物が大好きです。

日本は私の国より発展している国なので、日本の技術を習って、自分の国も発展させたいと思い、日本に留学しに来ました。

日本に来る前に、日本で生活ができるかな、先生方が厳しくないかな、日本人の友達ができるかな、と色々なことを心配していましたが、実際来てみると、全然違っていました。先生方は親切で色々なことを助けてくれました。日本人の友達も本当に優しくしてくれて、毎日楽しい生活を送っています。

私は今から3年間、久留米高専で授業を受けるだけではなく、日本の文化や習慣などを深く習ったり、一生忘れられないほどの経験をしたりたいと思います。そして、みんなと一緒に生活をしたいと思います。よろしくお願いします。

生物応用化学科3年

チャン トゥアン アイン



私はベトナムから来た留学生のアインです。ベトナムの大学で2年間勉強し、その後1年間東京日本語教育センターで日本語を学び、久留米高専の生物応用化学科3年に編入することになりました。趣味は写真を加工することやチャットすることです。特に得意なスポーツはありませんが、高専でバドミントン部に入部し、少しバドミントンが好きになりました。

日本の先端技術を学ぶために日本に来ました。久留米高専を卒業してからも、大学・大学院へ進学して勉強したいと思います。さらに、勉強以外のことも習得したいです。

去年、日本語教育センターで色々な国からの留学生たちと一緒に楽しい生活を過ごしましたが、日本人と話すチャンスが少なかったです。それで、日本人との文化・習慣の違いが理解できませんでした。久留米での生活を通して日本人の友達もたくさんでき、徐々に理解できてきました。

将来のことについて不安もありますが、いつも「諦めずに、頑張らなきゃ」という言葉を思い浮かべています。

## 平成20年度（平成21年3月）卒業予定者の就職内定状況

機械工学科	電気電子工学科	制御情報工学科	生物応用工学科	材料工学科
新日鐵	ヤマザキマザック	三菱重工高砂製作所	D I C	高周波熱錬
森精機	松下エコシステムズ	シャープ	旭化成	西日本旅客鉄道
ヤマハ発動機	キューキ	NTTデータ	麒麟ビール	NOK
ヤマザキパン	アイシン精機	西日本旅客鉄道	コーセー	IHI マリンユナイテッド
三菱重工長崎研究所	東レ	オリンパスグループ	三洋化成工業	第一精工
第一精工	九州電力	九州旅客鉄道	塩野義製薬	富士チタン工業
三菱重工神戸製作所	三菱重工長崎造船所	日本信号	資生堂	トヨタ九州
三菱重工高砂製作所	東京電力	ソニーEMCS	昭栄化学工業	日本ピストンリング
本田技研	エージーピー	NTTデータフロンティア	武田薬品	I N A X
東芝三菱	関電工	NEC ネットワークエンジニアリング	テクノ月星	J F E
三菱重工広島製作所	日本電子	JM エンジニアリング	東洋新薬	日本精工九州
牧野フライス	川崎重工業	ソフトサービス	日東電工	東研サーモテック
アイシン精機	シャープ		京セラ	東伸熱工
マツダE & T	久光製薬			T O W A
佐賀鉄工	日産自動車			旭化成
三松	パナソニックコミュニケーションズ			三菱重工神戸製作所
JAL航空機整備成田	リコーテクノシステムズ			
トヨタプロダクションエンジニアリング	西日本旅客鉄道			
キャノン	安川電機			
カヤバ工業	キャノンマーケティングジャパン			
東京電力	富士通			
三菱重工長崎造船所				

平成20年11月現在 久留米工業高等専門学校

## 平成20年度（平成21年3月）専攻科卒業予定者の就職内定状況

機械・電気システム工学専攻	物質工学専攻
マツダ	明治乳業
九電工	DOWA ホールディングス
日立情報通信エンジニアリング	昭栄化学工業
トヨタ自動車九州	丸東産業
戸畑共同火力	高周波熱錬
キャノンファインテック	三菱重工業長崎研究所
トヨタテクニカルディベロップメント	D I C
オリンパス	
九州武蔵精密	
三菱重工業工作事業部	
三菱電機プラントエンジニアリング	
求職者 12 男 11・女 1	求職者 7 男 5・女 2
内定者 11 男 10・女 1	内定者 7 男 5・女 2

平成20年11月現在 久留米工業高等専門学校専攻科

## 平成20年度 大学編入学合格状況等

大学名	合格者数					
	機械	電気	制御	生化	材料	計
豊橋技術科学大学 (推薦)	2	1			1	4
豊橋技術科学大学 (学力)	1		1	1		3
長岡技術科学大学 (推薦)	1			1		2
長岡技術科学大学 (学力)	2		1			3
九州大学 (工学)	1		2	3	1	7
九州大学 (経済)		2	2			4
九州大学 (芸術工学)		1				1
九州工業大学 (工学: 推薦)	1				2	3
九州工業大学 (情報工学: 推薦)	1	2	2			5
熊本大学 (工学: 推薦)	1	1			1	3
熊本大学 (工学: 学力)	1	1				2
山口大学 (工学)		1				1
広島大学 (工学)				1		1
広島大学 (理学)				1		1
大阪大学 (基礎工)			2			2
神戸大学 (農学)				1		1
東京大学 (工学)			1			1
東京工業大学 (工学)					1	1
東京工業大学 (生命理工学)				2		2
東北大学 (理学)	1					1
山梨大学 (工学)				1		1
筑波大学 (理工)			1			1
広島文化学園大学 (社会情報)			1			1
合計	12	9	13	11	6	51
重複者を除く実数	11	9	11	8	5	44

平成20年11月19日現在

## 平成20年度 久留米高専専攻科合格状況

学校名	合格者数					
	機械	電気	制御	生化	材料	計
久留米高専専攻科 (推薦)	0	3	2	6	3	14
久留米高専専攻科 (学力)前期	4	3	14	6	1	28
久留米高専専攻科 (学力)後期	2	3	0	1	2	8
合計	6	9	16	13	6	50

平成20年11月19日現在

平成20年度  
専攻科大学院合格状況等

大学院名	合格者数		
	機械・電気システム工学専攻	物質工学専攻	計
長岡技術科学大学大学院	1		1
東京工業大学大学院	1		1
東北大学大学院	1		1
九州大学大学院 (総合理工学府)	1	7	8
九州大学大学院 (工学府)	1	1	2
九州大学大学院 (システム情報科学府)	3		3
早稲田大学大学院	1		1
大阪大学大学院 (工学研究科)	2		2
北九州市立大学大学院		1	1
合計	11	9	20

平成20年11月19日現在

## 学生による授業評価アンケートについて

授業改善専門部会

久留米高専では、毎年2回、学期末に学生による授業評価アンケートを実施しています。学期毎に専攻科は全科目、本科では1クラス5～6科目の授業について、学生の皆さんからアンケートをとっていますが、この紙面では過去3年間のアンケート結果について簡単に報告をしたいと思えます。

まず、アンケートをとる目的ですが、これは主に3つあります。1つ目は、学生の皆さんが自身の授業に臨む態度や日常の学習状態について、自分で評価する機会を作ることです。アンケートの最初の5つの質問（「先生の説明を熱心に聞いたか」「予習や復習をしたか」など）は、このための質問です。

2つ目は、各授業担当の教員が、自分の授業に対する学生の評価を聞き、授業をより良くするための参考にすることです。そのために、「先生は熱意を持って授業をしていたか」「この授業によって学習する力がついたか」などの質問とともに、「もっとわかりやすく説明してほしい」「質問の機会を増やしてほしい」などの要望項目も設けています。

3つ目は、学校全体の授業科目の編成や、教室の設備などの授業環境に問題がないかをチェックすることです。授業のレベルが高すぎるという声が多い科目について、その科目をその学年で教えること自体を見直す必要が生じる場合もあります。

では、これらの点に沿って平成17年度～19年度のアンケート結果を見てみましょう。

図1は、学生が自分自身の学習態度を評価する項目についてまとめたグラフです。

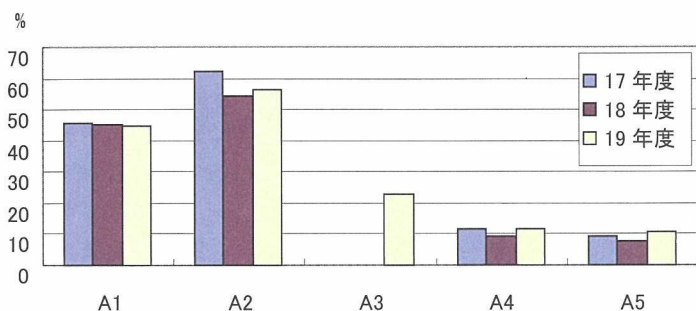


図1 過去3年間の比較(設問 A 群)

A3「わからないところを先生へ質問した」は19年度に新たに設けた項目ですが、それ以外の項目（A1「授業中、熱心に説明を聞いた」、A2「授業中、ノートやメモをとった」、A4「授業の予習や復習をした」、A5「授業に関連する内容を自主的に勉強した」）は、毎年ほぼ同程度の数字となっています。これを見ると、授業中は説明を聞きノートをとるが、予習・復習はあまりしない、という久留米高専の学生の傾向が伺えます。

次に、図2で授業に対する評価を見てみましょう。項目内容は、B1「シラバスは参考になった」、B2「教科書やプリント等の教材が適切であった」、B3「演習や課題はよく工夫されたものであった」、B4「先生は十分に授業の準備をしていた」、B5「先生は熱意を持って授業をしていた」、B6「質問をしやすくするなど、授業に双方向性をもたせる工夫があった」、B7「授業全体の構成は適切であった」、B8「この授業の内容に興味をもてた」、B9「この授業によって学習する力がついたと思う」、B0「総合的に良い授業だったと思う」です。

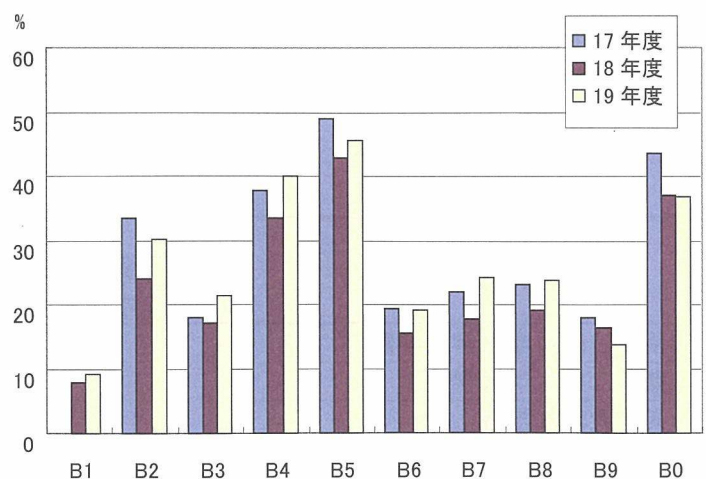


図2 過去3年間の比較(設問 B 群)

全体に平均値が50%以下というのは少ないようにも思われますが、各項目について「そう思う」人のみがマークするという回答システムなので、積極的な肯定を表す数字だと考えると、悪いとは言えないのかもしれませんが。先生の熱心さや、良い授業だったと思うかどうかなど、比較的學生に判断しやすい項目で数値が高くなっているようです。しかし、「授業の内容に興味をもてた」という回答が20%強にとどまっている点や、「学習する力がついた」と感じている學生も少ないことが課題と言えます。

次の図3は、授業に対する要望項目です。C1「先生の声を取りやすくしてほしい」、C2「板書を読みやすくしてほしい」、C3「演習や課題の内容を工夫してほしい」、C4「もっとわかりやすく説明してほしい」、C5「もっと質問の機会を増やしてほしい」C6「授業のレベルをもっと低くしてほしい」、C7「授業のレベルをもっと高くしてほしい」という内容です。

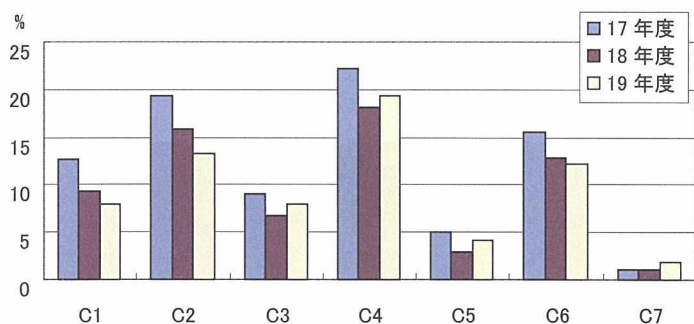


図3 過去3年間の比較(設問C群)

ここでも例年大きな変化はありませんが、C1「先生の声を取りやすくしてほしい」とC2「板書を読みやすくしてほしい」については、減少傾向が認められます。これは、各授業担当の教員が以前のアンケート結果を受けて徐々に改善してきた結果であると考えられます。C6「授業のレベルをもっと低くしてほしい」についても全体としてはやや減少しているようですが、平成19年度の1年生については27%もありました。これは従来の1年生と比較して10%も高い数値です。このことが、従来どおりの授業が1年生にとってわかりにくくなっていることを示すのかどうか、今後のアンケート結果を見て検討する必要があるようです。

學生の皆さんに回答してもらったアンケートは、機械で集計した後、各授業担当の教員に返却しています。そして、全教員に授業の自己評価を書いてもらっています。その中には、「説明がはっきり聞こえるように、言葉遣いや音量に気を配っている。」「ノートを取りやすいように、時間を与えている。」「丁寧な板書を心がけている。」「視聴覚教材を活用する、身近な例を挙げる、実際の現象と関連付けるなど、わかりやすい説明を心がけている。」「學生からの質問の時間を設ける、授業の感想を書いてもらうなど、双方向授業になるよう配慮している。」「授業で不足する分を補習したり、授業の最初に前回の復習を行ったりしている。」など、學生からの評価や要望を受けて改善に努力している点が多く挙げられています。アンケートには、質問項目に当てはまらない意見や要望を學生が自由に書くことのできる欄がありますが、この欄の声も教員にとっては参考になっています。

學生による授業評価アンケートは、教員が充実した授業を提供しているか、學生が熱意を持って授業に取り組んでいるか、そして良好な学習環境が整っているかを点検し、どこを改善すべきかを考えるための参考資料となるものです。しかし、そうなるためには、調査結果が正確に學生の声を反映していなければなりません。學生の皆さんが誠実に回答し、また、回答を正確に記入することが大前提となります。回答は機械で読み取るため、該当する数字を濃くしっかりと塗りつぶす必要があります。記入が面倒だと思う人もいますが、皆さんの回答が今後の授業を考える上での参考となることを意識して、ご協力をお願いします。

## 第18回九州沖縄地区高専フォーラムを終えて

高専フォーラム実行委員長 馬越 幹男

副実行委員長 中嶋 裕之

「第18回九州沖縄地区高専フォーラム」が12月6日（土）に久留米高専で盛会裏に開催されました。参加者総数は200名を数え、橋本康志鳥栖市長にもご参加いただきました。これも久留米高専の教職員の方々、5年生並びに専攻科生諸君のご協力によるものと深く感謝しております。

高専フォーラムは、九州地区高専間の教員交流、学生指導や学校運営に関する情報交換並びに高専を含めた各地域の活性化を目的として、鳥井昭美名誉教授（現在、特命教授）が平成3年度に本校から立ち上げ、昨年の1月に開催した高専シンポジウムの基にもなっています。

今回は、「久留米高専のアクションプラン～地域産業と市民との連携」をテーマに、本校のほか北九州、有明、大分、八代、鹿児島高専の学生を中心とした59件のポスター発表を始め、地域や台湾で活躍している8名の久留米高専卒業生の講演会及び「地域が久留米高専に望むこと」をテーマとしたパネルディスカッションを行いました。

中間試験後で、この冬一番の寒波が襲来しましたが、学生の研究発表では各ポスターの前で熱心な質疑応答が行なわれていました。卒業生は、高専での学生時代を振り返りながらこれまで歩んできた道のりを聴衆に大変熱く語りかけ、仕事に関する活発な議論が行なわれるとともに、母校に対する強い思い入れを感じました。また、パネルディスカッションでは、久留米市中心市街地活性化推進室課長補佐の田中健二氏が、キーレクチャーにおいて、久留米市の将来構想と課題、学術研究都市づくりの推進をベースに久留米高専に寄せる期待を述べられました。その後、5名のパネラーによるパネルディスカッションにおいても地域連携の課題、久留米高専に具体的に望むことが議論され、会場からも時間が足りなくなるほど提言がありました。

昨年1月に開催された「第13回高専シンポジウムin久留米」においても地域連携を掲げたイベントを多数企画いたしました。今回の高専フォーラムではさらに地域の生の声を聞くことができ、今後高専が如何に地域と密着していくべきか考える契機になりました。その一つとして、高専卒業生の協力が不可欠であることも強く感じました。

最後に、フォーラムの企画・準備に携わってくださった教職員の皆様、当日の生憎の天候にも拘らずご参加・ご協力くださった方々並びに学生諸君に改めて心からお礼申し上げます。



ポスター会場で熱心に議論する学生



パネルディスカッション風景

# 質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）の採択にあたって

## 【CIMSを活用した機械要素教育と産学連携】

機械工学科 藤田 雅俊

今日、大学などの高等教育機関が、知識基盤社会を担う優れた人材を養成し、高度化、多様化する社会からの期待に応えていけるよう、教育の質の向上を図る大学教育改革の取組をさらに加速させていくことが求められています。文部科学省では大学改革推進プログラムのメニューを整備し、優れた取組み「Good Practice (GP)」を認定、支援策を講じています。急激に変化する今日の高等教育機関の置かれた状況に伴い、様々な角度からのプログラムが用意されています。特に学校全体での教育に関するプログラムとしては、平成15年度より進められてきた「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」があります。本校でも昨年度より現代GP「産学連携共同教育による実践的技術者育成」が採択され現在進行中です。

平成20年度より現代GPと特色GPが統合され「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」としてリニューアルされました。全国の国公立の大学・短大・高等専門学校から939件の応募があり、148件が採択となりました。このうち高等専門学校は80件の応募に対して13件が採択となっています。本校では「CIMSを活用した機械要素教育と産学連携」が認定を受け、今年度より3年間の取組を開始しました。

CIMSは、自動車産業などを中心とした幅広い製造業で進化を続けてるデジタル・エンジニアリング・システムです。

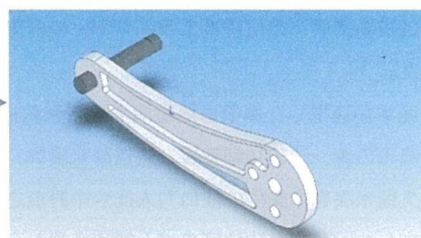
本取組みでは、機械技術の集積である機械要素の設計に焦点をあて、従来より評価の高い工場での実習教育を基盤として、CIMSを活用し、さらに効果的な技術教育に展開するものです。学生の教育ツールとして、ここ数年で定着してきている3次元CADをさらに発展させ、CAE・CAMとの同調を進めます。また、地元企業向けの技術者支援として公開講座を充実させ、地域貢献と研究連携の一層の向上を図ります。

この取組みは、デジタル・エンジニアリングの学校全体での活用を目指すものであり、採択理由の中でも指摘されています。  
(<http://www.jsps.go.jp/j-goodpractice/koubo.html>)

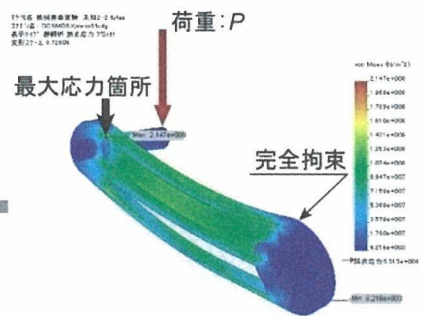
この取組みを通して、これからの社会に対応した技術教育の進展を図りたいと考えています。学生のみならず、学校内外の皆様のご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。



(a) ウインチハンドルの最適設計風景



(b) ウインチハンドルの3Dモデル



(c) ウインチハンドルのFEM解析結果



(d) ウインチハンドルの強度検証試験風景



(e) 強度試験後のウインチハンドル

設計段階でのフィードバック

検討にてフィードバック

CIMS (Computer Integrated Manufacturing System) 3次元CADによる設計手法を核とする、デジタル・データを活用した製造システムです。工学的数値解析 (CAE)、マシニングによる製造支援 (CAM)、資材・生産・コスト管理、広報・接客ツール (テレビCMやパンフレットなど)、ロジスティクスまでを統合化し、企業マネジメントの効率化に役立てられています。

## ゴム加工技術者人材育成事業

生物応用化学科 森 哲夫

久留米市をはじめ北部九州にはゴム関連企業がたくさんあります。久留米高専は、地元の公的機関や企業等と連携して、平成元年から17年度までゴム関連技術者のための研修事業を行って来ました。

この長年の事業の成果が認められ、平成18、19年度には経済産業省の「高等専門学校等を活用した中小企業人材育成事業」で、全国で初めて中堅技術者に対する系統的なゴム人材育成プログラムが実施されました。久留米高専・久留米リサーチパーク・福岡県工業技術センターの施設・設備を利用してゴム製品の製造に重要な配合・練り・成型・加硫工程までの実践的知識の習得と実習を行いました。平成20年度には「ゴム加工技術者人材育成事業」としてゴムの実践技術講座、熱可塑性エラストマーの射出成型講座等を開催しました。

この産学が連携した事業は藤道治本校名誉教授を中心に企画され、久留米高専の森、津田祐輔教授、渡邊勝宏講師、榎藤豊彦技術専門職員、久留米高専卒業生の江口力人氏や中野貞之氏も講義や実習を担当しました。北部九州地区のゴム関連企業から20名（久留米高専卒業生も数名）の参加がありました。日本のゴム産業発祥の地である久留米で、各種ゴム製品の製造に対応できる技術者の養成は重要です。久留米高専卒業生の活躍と久留米高専のゴム産業への貢献の持続を期待します。



## 寮ゴミ分別システムの導入

寮務主事 機械工学科 櫻木 功

本校の筑水寮では、従来からゴミ分別をしない事業所ゴミ扱いで処理されてきたため、その処理費用は寮のみで年間約70万円（ゴミ袋代含）に達していました。最近では食材・灯油なども高騰し、現状の寮費では寮運営が厳しくなっていました。

そこで寮生会役員と協議し、寮内のエコ活動（ゴミ低減・節電・節水等）に取り組むことになりました。特に、寮のゴミ分別システム（寮生による可燃ごみ、ペットボトル、缶類、ビン類等への分別回収）は、写真に示すような屋根・シャッター付ゴミ集積場の整備（校長裁量経費と後援会費の援助による）・寮生会の美化委員による見事なゴミ分別収集指導・久留米市による家庭用ゴミとしての承認（環境部業務課の手厚いアドバイス）・本校教職員の了解（各学科の教室会議・学科長委員会の審議）を得て実現されたものです。

今後は、本校の学生全員がゴミの削減や分別回収等に対して意識改革を持つようになり、またこの寮のゴミ分別システムが、教職員・後援会・久留米市役所の皆さんの協力によって久留米高専ゴミ分別システムへと発展し、CO<sub>2</sub>削減と校内美化活動等が推進されることを期待します。





## 久留米高専祭の歴史とその役割について

校長 前田 三男



昭和21年秋の体育祭

平成20年度の高専祭は例年通り11月2日から4日間開かれ、今年  
は天候に恵まれたこともあって、かなり盛り上がりました。久留米  
高専の学園祭はこれで43回目だそうです。ということは新高専がで  
きた頃から、毎年続いてきた行事だということになります。実は私  
は、一時期今年の高専祭が中止になりそうだという話をきいて大変  
心配していました。結果的には学生諸君が実行委員会を2つに分け  
るなどの工夫をして、うまく切り抜けてくれたようですが、高専祭  
プログラムの巻頭挨拶文を求められたとき、そのことも頭にあって  
「長い間学生の手で自主的に運営されてきた高専祭の伝統を守るの  
は大切なことだ」といった趣旨のことを書きました。

といっても、私自身久留米高専祭の歴史を知って、そういうこと  
を書いたわけでもなかったもので、この機会に久留米高専20年誌、30  
年誌、40年誌と10年ごとに残されている記念誌や、同窓会が出して  
いる「回想記」などを読んで、過去の高専祭の歴史を少し調べてみ  
ました。そして、久留米高専祭やそれを主催してきた学生会が、起  
伏に富んだ過去を持っていることを知ることができました。こうい  
ったことは実際にやっている学生諸君も、あまり知らないだろうと  
思いますので、高専祭の歴史とその役割について、私の意見も交え  
ながらまとめてみました。

### 旧制工専時代

旧制の高等学校出身の方々の回想録を見ると例外なく、バンカラ  
な格好で逍遙歌を歌い踊り狂って青春を謳歌した話が出てくるもの  
ですが、旧制久留米工専の回想記にはほとんどそういう記述がなく、  
戦争への「学徒動員」の話で埋められているのは、大変不幸なこと  
でした。旧制工専開校時にはまだ運動場すら整備されておらず、学  
生が整地作業を行ったという記録が残っています。

設立2年目の昭和15年4月には校友会が結成されますが、その年  
の12月には「国家の要請に依えて」、あえなく学校報国団と改称さ  
れました。当時もいくつかの体育部と文化部があったようで、九州  
大学高専馬術大会では15年準優勝、16年優勝しています。

校友会が復活したのは昭和21年3月のことで、その年の秋には体  
育大会が開かれています。旧制第8回生の方の回想によれば、昭和  
23年頃になると秋の体育大会の前には学科毎の応援団が結成されて  
練習を繰り返し、「旭屋デパート前や、久留米駅前まで蛮声を張り上

げてストームを繰り返した」そうです。戦後の荒廃した時期ですが、  
だれもが「青春のはけ口」を求めている様子がかがえます。同時  
にこの年には、「授業料値上げ」に反対する学生大会が開かれてい  
ます。

### 短大から新高専へ

短大時代の記録は多くありませんが、開設の翌年昭和34年には学  
友会が発足しています。この学友会は学長を会長として教職員も参  
加する組織で、現在の学生会とは少し性格が違います。私のイメー  
ジでは、短大自体がごちんまりまとまった家族的な雰囲気为学校だ  
ったようで、その雰囲気が学友会にも反映しています。

現在ある学生会の設立は、新制の高専の発足とほとんど同時でし  
た。他高専とちがって、それ以前に短大時代のバックグラウンドが  
ありましたから、新しい高専の建設をめざして、学生自体も学校側  
と一体化してその活動は最初からなかなか活発だったようです。短  
大時代には別々に行われていた体育祭と文化祭とを統一して、昭和  
40年にそれを高専祭と称したのが、久留米高専祭の始まりです。

翌年の文化祭は2日間にわたって学内開放し、盛大に弁論大会や  
各種の討論会が開かれました。これがいわゆる「大高専祭」の始ま  
りだと言われています。前夜祭やみこし行列の市中パレードが行わ  
れるようになったのは、昭和43年からでした。体育祭での騎馬戦や  
各科対抗リレーや応援合戦なども、最初からあったようです。こう  
いったものは、おそらく旧制工専時代からの伝統を受け継いだもの  
でしょう。文化祭の内容は、以下に述べるように時代とともに変わ  
ってゆきますが、体育祭の方は戦前から今日まで、基本的には変わ  
っていないように思います。



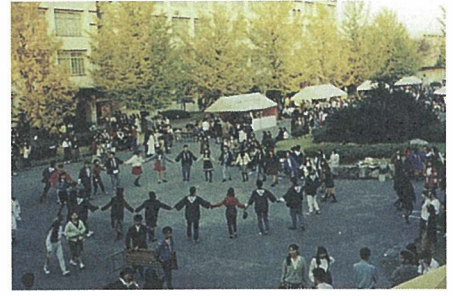
トロッコを引いて運動場の整備（昭和15年）



棒倒し



仮装行列



文化祭後のフォークダンス

高専創立当時のクラブ活動は、今と違ってどちらかというと文化系クラブの方が活発だったようです。まだ高専体育大会が今ほど盛んでなかったせいもあるでしょうか。特に新聞部の活動はめざましく、開校と同時に「久留米高専新聞」というなかなか立派な新聞を刊行し、昭和56年に「休刊」するまで、30号を出しています。学生会自身も初期の頃、「覚醒」という機関誌を出していたそうです。

学生会が主催するイベントには、現在も続いている高専祭、音楽祭、クラスマッチのほかに、遠足、マラソン大会、駅伝大会、寒稽古、予餞会などがありました。また学生会の呼びかけで毎年献血が行われ、多い年には500名以上の学生がそれに応じて、昭和57年には厚生大臣表彰を受けたそうです。

## 政治の季節、闘争の時代

昭和40年代後半には、日本のほとんどすべての大学の学友会組織は、いわゆる「70年安保」をめぐる、政治的な騒乱に巻き込まれました。私自身がいた九州大学では、本格的な大学紛争は昭和43年の米軍ジェット機墜落事故以降で、大学の建物の一部が全学連に占拠されて、講義がほとんど行われない時期がありました。しかし実際にはそれ以前から、頻繁に学友会主導のストライキやデモ行進が行われていました。私自身も学友会というのはそういう組織なのだという感覚を、学生時代には持っていました。

多くの新制大学の学友会は、発足当初から「学生の自治」というかなり厳めしい鎧を着て誕生し、それが政治的な道具に使われ、学園紛争のピーク時には極端に走って自爆してしまうという経路をたどったのではないかと思います。幸いなことに、多くの高専はそういう極端な政治闘争には巻き込まれないですんだようですが、しかし久留米高専学生会もそういった社会風潮の中で生まれ育っていった様子がかがええます。学生会の規則からして、今から見ると相当に身構えた厳めしさを持っています。記録によると、昭和43年には学生会と学校側との対立、学生会内部での闘争が頻繁に起こっています。44年には一部学生が「開放祭」という高専祭とは別のイベントを企てようとしたそうです。執行部は45年5月に臨時学生大会を開き、反安保のストライキ決議をしようと試みたそうですが、これは流会に終わりました。

文化祭の出し物も現在とはずいぶん違ってきます。40年代前半頃までは、今ではもうなくなった講演会、討論会、演劇、映写会がメインイベントでした。たとえば昭和42年の文化祭では、「先輩と後輩」「真の技術者とは」「若者と宗教」「恋愛について」「世界の現状」「学生運動の実態」「日本の公衆道徳」「クラブについて」という8つのテーマについての討論会が開かれました。いかがですか。学生諸君自身がこういうテーマを考えて討論したというのは、まさに隔世の感がありますね。

## 変貌する学園祭

さて、学園紛争が泥沼化して、終焉に向かい始めた昭和48頃から、学園祭も大きく変貌します。久留米高専20年誌によれば、その兆候は学園紛争後期にまず、正式の部活動ではなく、個人的な同好者の集まりである「同好会」が激増したことを指摘しています。20年誌の編集者はこの時期を学生会活動の「停滞期」として、「学生の学生会ばなれ」「文化祭での喫茶店や食べ物屋の増加」「体育祭での目にあまる仮装行列」といった「退廃ムード」を嘆いています。これは学園紛争のあと全国の学友会で例外なく起こった現象で、それ以降多くの学校が学園祭の運営に苦しむこととなります。

私がおもしろいと思ったのは、昭和60年代になると、学校側が指導して学生会の立て直しをやったことです。学生会の役員やクラブの部長などをしている学生たちを対象にしたリーダー研修会というのが何度か開かれています。成功したかどうかはともかく、これはいかにも高専らしい発想だと思いました。また平成4年から6年にかけては、九州地区の高専の学生会役員が集まった交流会がもたれています。

ともあれ大きく見れば、それ以降の学園祭のムードはそれほど変わっていないように思います。それは「退廃ムード」というより、若者自身の趣味指向の変化、若者文化の変化と捉えるべきでしょう。趣味指向やファッションが多様化し、学校という組織の中で集団行動を強制されることを好まない傾向が強まっています。その中でどの学校でも学園祭、特に文化祭の内容は大きく変わらざるを得ない状況になってきました。



マラソン大会

その背景には、大学や高専のような高等教育機関の学生の「大衆化」があるように思います。旧制の帝国大学はもちろん、旧制の高等学校や高等専門学校に学生にも独特のエリート意識がありました。旧制高校生のバカ騒ぎも、一種のエリート意識の表れでした。そういったエリート意識は、政治色が異様に高揚した学園紛争の頃までは健在でした。それが崩壊したあとに「大衆化」が起こったわけです。その結果、学園祭の行事はよりお祭りの的になり、大げさに言えば、商業的なエンタテインメントや、テーマパーク風のアトラクションを模倣する方向に進み、旧来の識者たちを嘆かせることになりました。

「そんなくだらないものはやめてしまえ！」という意見もあります。しかし、変質したとはいえ、私は学園祭は今でも必ずしもその存在意義を失ってはいないと思います。

### 学園祭や学生会の存在意義

それでは学園祭は、現在どのような存在意義を持っているのでしょうか？私の考えでは、一つの重要なポイントは「学生の自治」にあると思います。学生会は学生の自治組織です。といっても、それはあくまでも「学校」という枠の中の組織です。学園祭も「学校行事」の一つですから、「学校」が決めたルールに違反する行為は許されません。学園紛争時代の学生会はそのルールを無視して「学生の自治権」を主張し、しばしば「学校側」と紛争を起こしました。

そういった制約があるとはいえ、久留米高専祭は学生諸君が自分たちの手ですべてを企画し、実行できる数少ない行事です。そのことを学生自身が自覚して、その伝統を大切にしてほしいと思います。確かに自分たちの手で何かのイベントを立ち上げ、実施するというのは大変労力のいる仕事です。実は私はこの20年間、妻とともに20回の音楽祭と、100回近いコンサートを、ボランティアの人たちとの協力で自主的にやってきましたので、そのことについては皆さんより遙かに多くの苦労を重ねてきました。（詳しくは本校HP「校長の独り言」のNo.9をご覧ください）

例えば1回のコンサートを開くにしても、まずどんな内容のコンサートなら人が集まるかという「企画」で頭を悩ませます。それから出演者たちとの日程調整やギャラの交渉、会場予約、様々なメデ



予餞会

ィアでの広報活動、寄付金・助成金・広告集め。イベントはお客さんが来ないと成立しないので、人集めが一番苦勞するところで、有料のコンサートならチケットの売り込みが必要です。私たちがやっているコンサートは外国人を招くことも多いので、演奏会が終わるまでは、何かハプニングが起こらないか、天気はどうかと心配の連続です。

高専祭で実行委員をされた方なら、その苦勞が十分わかりでしょう。なぜそういう苦勞をしながら、一銭の足しにもならないイベントをやるかということ、苦勞をしたものほどやったあとの達成感の喜びが大きいからです。すべてを自分たちの手でやったという自覚が大切です。若い方々の場合には、その体験は大きな宝として残るでしょう。

もう一つは、青春の情熱のはけ口としての高専祭の効用です。旧制高校生のバカ騒ぎも、紛争時代の学生デモも、若者のエネルギーのはけ口だった面がありました。日常的な生活の繰り返しの中で鬱積したフラストレーションは、若者の心の中でむしろ昔より増大しているのではないのでしょうか。孤独に悩む学生にとっては連帯感を回復するチャンスです。もともと「祭」には集団行動のなかで、そういったフラストレーションを一気に解消する効用があります。

しかし以上の二つの効用は、できるだけ多くの学生諸君が高専祭に何らかの形でコミットすることが前提になっています。そうでない学生にとっては、確かに学園祭はたいした意味がないかもしれません。今年の高専祭では文化祭と体育祭とは別々の実行委員会を作ったそうですが、役割を分担して沢山の学生に実行委員になってもらうのはいいことだと思いました。また、必ずしも実行委員でなくても、色々な形のコミットが可能だろうと思います。

高専祭の3番目の意義として、学園を社会に開放して、多くの人たちにその存在を知ってもらう機会にするという面があるようです。最近は地域連携とか、少子化対策で、学校側も色々な形で学校のPRに熱心になってきました。そのような地域連携活動の重要性を高専が自覚し、学校主催で色々なイベントをやるようになったのは最近のことで、昔は高専祭がおそらく唯一のキャンパス開放の場ではなかったかと思います。「みこし行列」も久留米市民に対する一種のデモンストレーションです。久留米高専の社会的知名度が高まり、評価が上がることは学校側にとっても、学生諸君にとっても望ましいことでしょうから、キャンパス開放行事としての高専祭の役



クラブ活動



ロボットコンテスト

割は、今後まだ発展しそうです。これは教職員と学生で協力体制をとってやった方がいいだろうと思います。

### クラブ活動を活性化する他流試合

学園祭と並んで、クラブ活動は学生会活動のもう一つの大きな柱です。現在の高専のクラブ活動が昔に比べ活発なのかどうかは私には分かりませんが、一般的に高専には大学受験がないので、クラブ活動は比較的活発だと言われています。しかしそれでも、活発な部とそうでない部があるようです。特に文化系クラブの停滞が、目に付きます。それが高専祭で文化祭そのものを低迷させているのではないかという感じが私にはします。

その際、高専のクラブ活動を活性化させているのは、対外的なコンペティションではないかというのが、高専に来て私が感じた印象です。高専におけるクラブ活動で圧倒的に体育系が強いのは、高専体育大会があるためではないでしょうか。体育系クラブのほとんどは高専体育大会を目指して一年中活動しているように見えます。昔の学生会規則では、クラブ活動は体育系と文化系と技術系の3部局に分類されていたようですが、その分類で言えば技術系クラブもまた、ロボットコンテストとか、プログラミングコンテストといった対外的なコンペティションを軸に活動している部や同好会が大部分です。

それが文化系のクラブを対象にしたものとなると、最近高専機構の主催となった英語スピーチコンテストぐらいしか、思い浮かびません。ところが世の中には、文化・芸術・芸能関係にも色々なコンテストがあるのです。美術関係では、絵画や工芸や写真などの展覧会で技を競っています。音楽関係では、ブラスバンドや合唱コンクール、映画・アニメーション・演劇関係でも色々なコンクールがありますが、なぜか高専でそういったものが話題になることがほとんどありません。高校のブラスバンド部などでは、体育系クラブ以上のハードトレーニングをやって、全国大会を目指している学校もあります。

そういう全国規模のコンペティションがあれば、目標ができて部活動も盛り上がりますし、学校側も学生がいい成績を上げれば宣伝

効果も大きいので、力を入れることになります。もちろん私も、コンテストに出ることだけが部活動のすべてだとは思いませんが、一般的に高専の文化系クラブが低調なのは、そういった動機づけを欠いている点に原因があると感じています。文化系のクラブもその種々の他流試合に積極的に参加して技を磨くのが、その活動を活性化させる早道ではないでしょうか。趣味を同じとする同好の士の集まりというだけでは、基盤が弱すぎます。

音楽関係の部や同好会は、高専祭や音楽祭に出ることを目標に練習しているようですが、その他のクラブも、そういう機会にはもっと積極的に展示会やパフォーマンスを行い、自分たちの活動を外部にアピールしてほしいものです。学生の趣味が多様化しているだけに、みんながやる気を起こして競い合えば、昔より遙かに華やかな文化祭ができるのではないかと思います。

### 【後記+お詫び】

2009年明け、アメリカではオバマ大統領が誕生し、世界不況は何処へ?とも感じさせる熱狂を持って迎えられました。

様々なことが転換を迫られる昨今、今までと同じで良いとは嘯いていられない「CHANGE」の年となりそうです。今年だけではなく、この先ずっと続いてゆくことも知れないですね。

「高専通信」60号は秋冬合併号として発行することになりました。編集をしている間にも、学校は既に入學試験の準備に、最終学年の学生諸君は卒業研究やインターンシップ報告の取りまとめに追われて、知らぬ間に春はやって来そうです。